

井上哲次郎における「日本哲学」の存在証明とその失敗

水野 博太

はじめに

井上哲次郎のいわゆる「三部作」は、例えば『日本陽明学派之哲学』の序文で「現今に於ける社会的病根」を治療し「国民的道徳心」を作興する意図が述べられていることから、これまで井上の「儒教イデオログ」的側面と絡めて論じられてきた。^①一方で同じ序文の中で述べられているように、それは「明治三十年」に開催された「仏国巴里府開会の万国東洋学会」で行った発表「日本に於ける哲学思想の発達」の延長線上に位置するものでもあった。^②近年では井上の「三部作」中に見られる陽明学理解に水戸学の影

響を見出すことで「前近代との関連」を強調する研究もあるが、少なくとも井上の記述に基づくならば、井上の「三部作」は、世界（西洋）に対して「日本哲学」をいかに発信するかという極めて「近代」的な問題意識からスタートしている側面を見落とすべきではない。

森下直貴は、井上哲次郎をめぐる従来の研究動向を整理する中で「日本哲学」を「世界哲学」として捉えられない視野の狭さ」や「一国主義的な偏り」を批判しており、ともすれば明治期の思想史が同時代の西洋から不断に刺激を受けながら成立したという事実が見落とされがちであったこと、あるいは井上をはじめとする個々の思想家の中に見える西洋思想の要素が、単に未熟な「折衷」として軽視

されがちであったことを指摘している。⁽⁴⁾ 明治期の思想家たちが、その思想の形成過程で海外（西洋）から具体的にどのような刺激を受けていたのかを探究することは、今後も引き続き必要な作業であると思われるが、明治期の思想史を世界的な文脈の中で捉え直すには、それと同時に、彼らが海外に対してどのような刺激を与えたのか、あるいはどのような相互作用が生じたのかも問われる必要があるだろう（無論「発信」の量は「受信」と比べれば微々たるものにはなるだろう）。

このような観点を踏まえるならば、明治以降の思想史に少なからぬ影響を与えた井上の「三部作」を取り上げる際、上述のように最初から「世界」を強く意識していた井上の問題意識を改めて検討する必要があるのではないか。そもそも現代では「江戸儒学」と形容されることの多い「三部作」に、井上本人はあくまでも「日本哲学」と銘打つていたことを軽視してはなるまい。

それでは、井上が世界に対して「日本哲学」の発信を試みた発表の内容とは、どのようなものだったのだろうか。

一 「日本哲学」はあるか

（一）井上のバリ発表論文について

明治三〇（一八九七）年、パリで開かれた第一回国際東洋学者会議において、井上はフランス語で論文「ヨーロッパ文明導入以前の日本における哲学的思想の発達について」(Sur le Développement des Idées Philosophiques au Japon avant l'introduction de la Civilisation européenne)を発表した。この論文は発表の翌月、井上自身による増補を経た上で、井上留学中・ベルリン東洋語学校講師時代の教え子であったアウグスト・グラマツキー⁽⁵⁾ (August Gramatzky) によって「日本における哲学的思想の発達の概観」(Kurze Übersicht über die Entwicklung der philosophischen Ideen in Japan)としてドイツ語訳され、ヨーロッパ各国に送られた。⁽⁶⁾

この井上の論文は、フランス語版・ドイツ語版ともに三十ページ弱に過ぎないが、しかし既に述べたように、後の「三部作」の原型となるものであり、江戸時代の日本儒学を「日本哲学」という枠組みで、かつ外国語によって発信した、おそらくは初めての作品である。

『井上哲次郎集 第九卷』（クレス出版）の「解説」では「この講演は明治三十年代の井上の研究を規定するものとなり、以降、彼は儒教を軸とする本格的な日本哲学史の研究に取り組むようになる」と紹介されており、また同書にはドイツ語版が原文のまま収録されているが、その内容について詳しく検討されてはいない。⁽⁷⁾ この「解説」の内

容は、それ自体は正しいように思われる。ただし、そこでは井上の「日本哲学史」への志向が「日本的な伝統」への「傾斜」として表現され、木村鷹太郎・高山樗牛らの「日本主義」と重ね合わせて論じられ、来るべき「国民道德論」への助走段階として捉えられている所から、井上が「世界」とどのように対峙し、何を発信しようとしたのかという本論文の観点から見れば、なお掘り下げるべき課題が残されているようにも思われる。そこで、まず井上が国際東洋学者会議で行った発表内容に基づくフランス語版の論文の内容を概観し、井上がどのような問題意識から、この「日本哲学」に関する発表を行ったのかを確かめたい。

同論文は、フランス語版もドイツ語版もひとしく、藤原惺窩・林羅山・中江藤樹・山崎闇斎・山鹿素行・伊藤仁斎および伊藤東涯・貝原益軒・荻生徂徠(物徂徠)・大塩平八郎(大塩中斎)という人物ごとに全体を九節に分ち、それぞれの思想の特徴を概説する形式になっており、さらに全体の最初と最後に序文と結論が加わる。ドイツ語版では、各人物などに関する情報やエピソードが、例えば『先哲叢談』などを参照しながら脚注において補足されている点がフランス語版と異なっているが、本論の内容はどちらもほぼ同じである。また言うまでもなく、井上が取り上げたこれらの人物は、いずれも後の「三部作」で重要人物として

扱われることになる。

(二)「日本哲学」をめぐる西洋の認識について

井上の執筆意図は「序文」(Introduction)できわめて明確に述べられている。それは、日本における哲学の不在という当時の西洋世界の認識を打破することであった。

明治期に日本を観察した西洋人は、日本に独自の「哲学」は存在したことはないという認識を有していた。抽象的思考に欠ける日本人には「哲学」は不可能であると考えた西洋人もいた。例えば、明治六(一八七三)年にお雇い外国人として来日したイギリスの日本学者・チェンバレン(Basil Hall Chamberlain)が著した、事典形式の日本紹介書である『日本事物誌』(*Things Japanese*)の明治一三(一八九〇)年に出版された初版では、「哲学」(Philosophy)の項目には全体で次の三文しかない。

日本人はこれまで自分自身の哲学を持つたことがない。かつて彼らは孔子の祭壇の前に跪いていた。今や彼らはハーバート・スペンサーの祭壇の前に跪いている。⁹⁾また「儒学」(Confucianism)の項目では次のように述べ、日本における「獨創性」の不在を説明している。

儒学者の中で最も著名(eminent)の執筆者注、以下同)な日本人としては、京都には伊藤仁斎とその息子・伊藤

東涯、江戸には新井白石、荻生徂徠がいた。〔……〕彼らは解説者〔expositors〕に過ぎなかった。いかなる日本人も、儒学の体系〔Confucian system〕をより発展させようとしたり、改めたり、訂正しようとする獨創性〔originality〕を持たなかった——そのような獨創性は不敬な厚顔無恥として嘲笑されたであろう。日本の翻訳書や注釈書で読むに値するものは無い¹⁰⁾。

チェンバレンは、仁斎や徂徠が「著名」であることを認めつつも、彼らは「解説者」に過ぎず、獨創性を欠いていたと述べ、日本の思想には結局、中国から輸入された「儒学の体系」を乗り越えようとする試みが存在しなかったと主張している。

またチェンバレンと同年に来日したイギリス人宣教師のウォルター・デニング（Walter Denning）は、当時の有力英字新聞のひとつである『ジャパン・ウィークリー・メイール』（The Japan Weekly Mail）の明治二一（一八八八）年二月八日版に掲載された文章の中で、次のように述べている。

西洋における、より難解で哲学的な思索が、日本国民のうちの教育ある人々の間でさえ強い関心を集めるということは、この先数世代に渡って期待しがたいだろう。彼らの過去の歴史も、いま現在支配的となつていく嗜好も、理想主義〔idealism〕へ向かう傾向を見せる

ことはない。彼らは実践的で現実的なものを愛している。〔……〕我々の詩や、我々の哲学、そしてそれらを鑑賞する精神は、いずれも繊細な感化力の織りなす結果であるが、日本人はそれらにさほど縁が無い¹¹⁾。

デニングは決して当時の日本の「哲学」をめぐる活動状況に無知だった訳ではない。実はこの寄稿の前年、彼は帝国大学哲学科のメンバーを中心に組織された「哲学会」の定例会で「日本ニ於テ哲学上ノ急務ナル問題」と題した演説を行い、そこで日本の「哲学者」たちに対し、西洋の哲学者と同じようなテーマを追求したところで彼らに敵うはずがないのだから、当代の日本が直面している課題に即したテーマに取り組むべきである、という旨の忠告を行っている。

デニングがこの演説を行った明治二〇年前後は、日本国内でも急激な西洋化への反動が顕在化した時期であったが、彼もまた当時の日本の開化・西洋化を「皮相」「模擬」とみなして批判した。デニングによれば、本来「開化即ち「シブライゼーション」^{モデルン・シブライゼーション}」あるいは「近世精神」の本質とは、「其国民一般の風習」ではなく「開化したる諸国民の活力」、すなわち物質ではなく「精神」であつて、日本は「開化の精神のみ」を摂取すべきである。それゆえ日本における哲学の「急務」とは、西洋哲学者の真似をすることではなく、

「開化の精神」を撰取するために「西洋の開化」の中から「純粹の道理を以て其取るべきと捨つべきを決定」するのとに他ならない、とデニングは言う。⁽¹²⁾「風習」重視の「皮相」的西洋化を批判して「開化の精神」を強調するデニングの議論には明らかに福澤諭吉の文明論の影響が見て取れる⁽¹³⁾（実際、デニングはこれ以前に福澤と知り合い、慶應義塾で教鞭を執っている⁽¹⁴⁾）。

日本に「哲学」は存在せず、そもそも日本人は「哲学」には不向きである。少なくとも二人のお雇い外国人は、このような見解を共有していた（そして当時「日本哲学」の存在を叫んだ外国人は、管見の限り見当たらなかった）。日本経験の比較の深い彼らでさえこうだったのだから、国外のオリエンタリスト・シノロジストたちの認識は推して知るべしであろう。西洋の知識人の多くは、中国に「哲学」のようなものが存在していることは認めてはいたが、日本に独自の「哲学」があるとは当然みなしていなかったし、日本を経験した外国人たちは、なおさらその確信を強めていた。井上が「日本哲学」の存在証明を試みたのは、このような時代においてであった。

(三) 井上による「日本哲学」存在証明の試み

井上はパリでの発表論文の中で、日本の思想が抽象的原

理よりも具体的な「道徳」に重点を置きがちなこと、また日本人の思考が「実践」に傾斜しがちであることを否定しない。しかしながら、一方でそれは抽象的観念が「日本哲学」に存在しないことを意味せず、また「実践」を重んずることは、それ自身が「日本哲学」の独自性を特徴づける要素としても機能しているという。井上は次のように述べる。

私は、日本における哲学的思想の発達について、諸君の前に何らかの素描を示すことは少しく興味深いものと信じる。その思想は、ある種の宇宙論や自然哲学についての原則というよりはむしろ、道徳の原則を本質としている。しかしながら、それは日本の哲学が自然に対する考察を全くもって欠いているということに興味しない。後に論ずるように、我々はまた、十分に興味深いと感じるような宇宙論の観点を備えた哲学の体系を有しているのである。一般的に言って、日本の哲学は実践の領域から離れることを望まない。言い換えれば、経験的事実を離れて現象の外側の別の世界に至ることは、ほとんど想像の産物としかみなされない。それ（日本の哲学）は、常に個人の生活および国家の問題を解決することを原則としてきたのであり、それがその特性なのである。⁽¹⁵⁾

また井上は、日本の「哲学的思想」が中国（儒学）とインド（仏教）の影響を受けていること、その「最初の衝撃」（la première impulsion）が外国からもたらされたことを認めるが、しかし同時に、日本はその外来思想を十分に消化し、独創的な解釈を生み出すに至ったことを強調する。

これは、一方では近代日本の儒学解釈に見られる典型的な特徴のひとつではあるが、それと同時に、例えばチェンバレンが述べたような、「日本人はこれまで自分自身の哲学を持ったことがない」という解釈、あるいは「いかなる日本人も、儒学の体系をより発展させようとしたり、改めたり、訂正しようとする独創性を持たなかった」という解釈への挑戦でもあった。井上は言う。

日本の学派を、それは支那もしくは印度の哲学の解説に過ぎず、したがって何ら独創性を持たないとの非難を理由として、低く評価する人々がいる。それこそ誤りである。私の意見では、彼らは単なる一瞥のみで判断を下しており、しかも彼らには「知識の不足ゆえに」実際にはそのようにするだけの十分な理由がない。／言うまでもなく、儒学と仏教が日本の哲学的精神の誕生をもたらしたことを過小評価しようとする意図は、私には毛頭ない。その点「哲学的精神」についてわが国の伝統が未だ何も成し遂げていなかった時、哲学的に

考えるための最初の衝撃は外国からやって来たのであった。彼らがそれを受け入れてからしばらくして、それらの外来思想に重大な変革が生じ、それをきわめて独特かつ自国のものにしてしまった。その結果として、日本の哲学という名前を、正当な理由をもってそれらに当てはめることができるのである。¹⁶（／は改行）

繰り返すが、井上の意図は、日本における「哲学」の不在という認識を打破することにあった。それゆえ彼は、一方では「実践」性こそが「日本哲学」の特徴であると言いつつも、他方では江戸時代の思想家の中に、当時の井上が最も「哲学」的な要素であると考えた「宇宙論」や「自然哲学」を見出し、紹介することにも力を割いている。

井上が取り上げる思想家のうち、特に力点を置いて（分量多く解説されるのは山鹿素行、伊藤仁斎及び伊藤東涯、貝原益軒、大塩中斎であるが、その解説の中心に置かれているのはいずれも理気論（「気」一元論を含む）及びそれに基づく「宇宙論」である。特に大塩については、彼の「人間性（仁）の殉教者」（martyr de l'humanité）としての最期が短く紹介される一方で、彼が「十分に独創的な哲学理論」を持つていたことが詳しく解説されている。その「哲学理論」とは言うまでもなく「太虚」（le grand vide）を巡る学説であり、それは道徳を含む「ミクロコスモス」（microcosmos）

microcosme)に関連する要素が全て導かれる所の「マクロコスモス」(le macrocosme)の本質的な特性であって、「天」(le ciel)に他ならないとされる。¹⁷⁾大塩と陽明学の結びつき、そして『日本陽明学派之哲学』序文における「国民的道德心」の強調に慣れ親しんだ目には、「帰太虚説」の強調は奇異に思えるかもしれないが、しかし井上が大塩に向ける視線は早くから、その実践者・行動者としての側面ではなく、「太虚」をめぐる哲学的独創性に向けられていた。¹⁸⁾素行や仁斎についても同様に、「陰陽」(Yin et Yo)に基づく世界(宇宙)生成観、すなわち「宇宙論」に力点を置いて紹介される。仁斎については、その「気」に基づく一元論を「極めて現代的で、既に進化論を知っていたかとさえ思いうほどである」と持ち上げられる。¹⁹⁾

一九世紀後半のヨーロッパにおいて、中国哲学の中でとりわけ理気論は西洋の目から見ても分かりやすく「哲学」性を有する思想として、シノロジスト・オリエンタリストによる探究の対象となっていた。²⁰⁾井上は、「日本哲学」についても理気論及びそれに基づく「宇宙論」が存在することを強調することによって、儒学を土台とした「日本哲学」を、西洋人にとって分かりやすい形で「哲学」の土俵へ押し上げようとしている。

また井上は「結論」(Conclusion)において、上記の日本

の「哲学者」たちがいずれも(朱熹や王陽明の単なる模倣を超えた)独創性を備えていたことを繰り返し強調する一方で、同時に彼らが孔子を模範・標準としていたことをも強調している。「日本哲学」の独創性を強調する一方で、それが朱子学や陽明学から派生して生じた、極東のさらに辺境における単なる奇異な思いつきではなく、西洋においても一定の権威を認められている孔子そのものの結びつきを主張することで、「日本哲学」の学術としての正統性をアピールしている。井上は言う。

いま私が行った簡単な叙述によって、我々において哲学的な考察というものが朱子と王陽明の教義の研究から始まったということ、しかし我々の思想家たちの多くはその道に長く留まることがなかったということが、はっきりと見て取れるであろう。彼らはすぐに、全く新しい人生観と世界観を形成するまでに成熟し、そしてそれは一般的に言って、支那人のそれよりも実践的であつただけでなく、より進歩的でもあつた。素行、仁斎、益軒、徂徠、そして中斎は、我々の哲学者のうち最も優れた人物であることに違いはないが、しかし彼らのうち誰一人として、孔子に敢えて反対しようとする者はいなかった。彼らの思想は、孔子の教えを批判するというよりは孔子を模範とするものであつ

た。簡単にいえば、彼らの意見の斬新さにもかかわらず、彼らは孔子を引き合いに出したのである。²¹⁾

この直後に井上は、日本には儒学者のみならず、儒学に反対した仏教徒 (Buddhists) や「神道主義者」(Shintoists) すなわち国学者も存在したことについて言及しているが、日本人の人格を形成し、一般庶民の教育を実質的に担ったのはやはり儒学であると述べている。西洋において、とりわけ東洋における「哲学」の存在に懐疑的なヘーゲル学派などの哲学者たちによって「東洋哲学」が語られる際に何より問題視されたのは、そこに多分の「宗教」的要素が含まれているとみなされたことであつた。²²⁾ 井上は、神道と仏教を「宗教」の領域に切り離し、儒学の理気論を基礎とした「宇宙論」「自然哲学」を中心に「日本哲学」を紹介することで、また孔子との直接的な結びつき強調することで、西洋における中国哲学の理解の上に立った「日本哲学」を提示しようとしている。

(四) 井上の発表の影響力

先述のように、フランス語で書かれた井上の論文は、ただちに元教子であるグラマツキーの手によってドイツ語へと翻訳され、小冊子の形でヨーロッパ各地に配布された(フランス語版の論文も、会議論文の抜き刷りという形で各所に送付

された。更にその約十年後、井上は、一九〇九年にドイツで出版された、日本・中国・イスラム・ユダヤからヨーロッパまでの古今東西にわたる「哲学」の概説を集めた著作『哲学の普遍史』(Allgemeine Geschichte der Philosophie) に共著者として参加しており、そこで「日本哲学」(Die japanische Philosophie) の章を執筆している。井上が留学先で「日本にも往古哲学者ありしや」と尋ねられてから二〇年²³⁾、遂に「日本哲学」は「哲学の普遍史」を構成する一要素として認められるに至つたのであつた(もともと、井上はそこで「日本哲学」には、外国から輸入された哲学のほかには独自・土着の思想的基盤は存在しない」という考えについて、改めて丁寧に否定することを忘れていない²⁴⁾。その内容は、上記の論文で述べられたような内容を核としながらも、全体を「朱子学派」「陽明学派」「古学派」「一九世紀の陽明学派」「国学派および現代哲学」という「学派」ごとに分かち、「三部作」で取り入れられた成果も随所に反映されている(例えば、中江藤樹の「良知」とウバニシャッド哲学におけるブラーマンの比較など)。その最後は「おそらく日本における哲学は、東洋の思想と西洋の思想の衝突および融合を通じて、遠くない将来に大いなる発展を遂げるであろう」という言葉で締め括られる。²⁵⁾

同書の共同執筆者には、ヴント (Wilhelm Windt) やグ

ルーベ (Wilhelm Grube) など、井上が留学中に知り合った学者が含まれている。この人脈を通じて井上の執筆に繋がったとも考えられるが、同時に、ドイツ語で西洋の読者に向けて「日本哲学」を書ける人材は、この頃には井上以上の適役を見つけ出すことが難しかったことも確かであろう。従来「日本主義」あるいは「国民道徳論」をキーワードとして論じられてきた明治三十年代から四十年代の井上の学術活動は、必ずしも日本国内で完結していたのではなく(むろん「日本主義」として「世界」を意識してこそ「日本」を強調したのではあるが)、「世界」に向けての発信と表裏を成していたと言うことができる。

それでは、これまで見てきたような、井上による「世界」へ向けた「日本哲学」発信の試みは、実際には「世界」でどのような影響力を持ったのだろうか。確かに『哲学の普遍史』に「日本哲学」を混ぜてもらうことはできたしかし、西洋のオリエンタリスト・シノロジストたちは、「日本哲学」の存在と独自性を、本当に認めたのだろうか。結論を先取りして言えば、必ずしもそうはならなかったように思われる。しかし、井上の「日本哲学」発信の試みは、井上が当初意図したのとは別の形で、「陽明学」を媒介として、世界に対して影響を及ぼすことになる。

二 「日本哲学」の存在証明の失敗と陽明学

(一) デニングによる「三部作」への書評とその着目点

井上の「三部作」は、先に述べたように、その影響力を「国民道徳」の形成と絡めながら、しばしば国内で完結したものととして論じられがちであった。たしかに井上は「三部作」を、日本語で、日本人に向けて書いた。しかしながら、まず指摘しておくべきは、その「三部作」への英語による書評が行われているということである。その書評を行ったのは、かつて「日本人は哲学に向いていない」と喝破したデニングであった。

デニングの「三部作」への書評は、明治四一(一九〇八)年、日本アジア協会 (Asiatic Society of Japan) の紀要に掲載された。この頃デニングは井上と個人的な交友関係を持っていたようで、例えば井上は同年の年始にデニングへ年賀状を送っている^②。しかしながら、書評の中でデニングは、先述のような「日本における哲学の不在」を打破しようとした井上の意図とは裏腹に、日本と「哲学」の関係について極めて消極的な態度を崩していない。と言うのは、デニングの書評には序文 (Introduction) が付されているのだが、その序文の内容は、かつてデニングが『ジャパン・ウ

イークリー・メイ」に寄稿した文章はそのままであったからである（そこでデニングは、日本人が「哲学」に向かないことを縷々述べたのであった）。井上の「三部作」を踏まえて新しく追記された部分でも、デニングによれば、「三部作」で取り上げられている内容は「思索的」(speculative)と言うよりは「道徳」(moral)に関するものであり、「純粹な思索」(pure speculation) はやはり日本人にはほとんど見られない、と念を押している。その意味で、「日本哲学」の中にも「宇宙論」などの要素があると見せることで「日本における哲学の不在」という観念を打破しようとした井上の努力を、残念ながらデニングはさほど認めていないことになる。

一方でデニングは、日本が中国から受け入れ、発展させたその「実践哲学」(practical philosophy)には、西洋哲学の一部の学派が催させるような嫌悪感がなく、それは「高度な叡智の統合として」、「日本の」世間の良識ある人々、とりわけ政治家たちに受け入れられた」と称賛している。⁽²⁸⁾ デニングは「三部作」のいずれについても書評を行っているのであるが、とりわけ『日本陽明学派之哲学』について、次のように肯定的に述べている。

井上博士は陽明学派の歴史について、次々と主要な著述家全てについて、彼らの記述を引用したり、教義を

解説したりしながら、綿密な解説を行っている。日本の哲学的思想に関するこれほど明瞭な説明は、日本語では他に存在しない。日本語を解し、日本の紳士との交際に慣れ親しんだ外国人にとっては極めて馴染み深いような、あの日常生活における高い道徳的水準はどこからやって来るのかという質問に対して、『日本陽明学派之哲学』は間違いなく最善の回答である。⁽²⁹⁾

「陽明学」と「道徳」の結びつきは『日本陽明学派之哲学』の中で強調されているものであるが、しかしそれは少なくとも、井上が「世界」に向けて意図して発信しようとしたものではなかった。むしろ井上は、先述の国際会議での発表で、日本が陽明学を受容したことを語っていない訳ではない。しかしその力点は、「国民的道徳心」を強調する国内向けの解説とは異なっており、あくまでも陽明学を吸収した日本人が独自の「哲学」を打ち立てたという点に置かれていた（たとえば大塩を紹介する際には、「道徳」や「実践」性ではなく、独創的な哲学としての「太虚説」に力点を置いて紹介したのであった）。井上の目的は「日本哲学」の独自性を証明する所にあつたからである。しかしここでデニングは、「三部作」の原著を読破することによって、井上が国内向けに示した「陽明学」と「道徳」の結びつきに着目し、そこに肯定的な評価を下している。

結論から言えば、井上が「世界」に対して影響力を行使したのは、独創的な「日本哲学」の存在を証明することによってではなく、そこから生じた「三部作」を通じて喚起された、明治後期から大正初期の日本における「陽明学」の再興によってであり、それが清末民初の中国、ひいては西洋のオリエンタリスト・シノロジストたちにも影響を与えた。彼らが着目したのは、デニングと同様に、井上が「日本における哲学の不在」という観念の打破という意図を持って海外に向けて発信したような、陽明学を吸収して独自の理気論・宇宙論を発展させた「日本哲学」の一部としての「日本陽明学派の哲学」ではなく、「支那哲学」の一分野としての「陽明学」であって、それが日本で、ひいては一度は陽明学が忘れ去られた中国で再興しつつある、という事象についてであった。

(二)「日本陽明学」の射程

清末民初期の中国が、明治・大正期の「日本陽明学」をめぐる動向から影響を受けていたことについては、早くから指摘がある。例えば荻生茂博は、井上の『日本陽明学派之哲学』⁽³⁰⁾に影響を受けて梁啓超が『節本明儒学案』を出版したことや、「陽明学が明治維新を先導した」というストーリーが訪日留学生を通じて中国大陸へ輸出されたこと

を指摘している⁽³¹⁾。しかしながら、その射程は単に中国大陸に留まるものではなく、「東アジアにおける陽明学の復興」という事象を通じて、西洋のオリエンタリスト・シノロジストたちにも影響を与えた。そして彼らは例外なく、繰り返すように、「日本哲学」ではなく、「支那哲学」の一学派としての「陽明学」に着目したのであった。

二〇世紀前半の西洋における陽明学研究の受容と展開を論じた近年の研究として、ジョージ・イスラエル(George G. Israel)による論文がある⁽³²⁾。以下では、このイスラエルの研究を参照しながら、適宜そこに示されている原典に当たりつつ、またイスラエルによつては指摘されていない点について執筆者による補足を交えながら、日本の陽明学研究が、西洋にどのような影響をもたらしただのかを確認したい。

王陽明への着目それ自身が日本の影響を受けて始まったという訳ではない。イスラエルの指摘するように⁽³³⁾、イギリス人外交官・東洋学者のトーマス・ワッターズ(Thomas Watters)は、一八七九年の著作の中で『王陽明先生全集』に基づき王陽明の生涯および「良知」の概念を六ページに渡って論じている⁽³⁴⁾。しかしながら西洋において、王陽明は一九一〇年代まで大きな注目を集めてこなかった⁽³⁵⁾。

一九一〇年代以降、西洋でも王陽明を取り上げた著作が続々と出版されるようになるが、それは繰り返すよう

に、日本および清末民初期の中国を含む東アジアにおいて「陽明学」に注目する動きが現れたことに触発されたものであった。それゆえ必然的に、当時の西洋が陽明学を見た視点も、当時の東アジアで支配的となった陽明学観から大きな影響を受けている。一九一四年にアメリカ人メソジスト派宣教師のフレデリック・ヘンケ (Frederick Goodrich Henke) によって書かれた論文「王陽明——中国の理想主義者」(Wang Yang Ming: A Chinese Idealist) は、イスラエルによれば「西洋の學術雑誌に掲載された最初の王陽明に関する學術論文」であるが、この中でヘンケは、王陽明の道德体系においては「知識と行動」「理論と実践」の両立が重視されており、それは日本と中国で大きな影響を持つている、と述べている。⁽³⁷⁾ 先に見たワッターズの著作の中では、王陽明の経歴と「良知」がもっぱら論じられており、「実践」という要素はさほど着目されていなかったが、ヘンケの著作では「道德」における「実践」「行動」の重要性が指摘されるようになっていた。

このヘンケの論文は、鈴木大拙も助手として参画したオープン・コート (Open Court) 社の刊行する雑誌 (*The Monist*) に掲載されたのであるが、興味深いことに、イスラエルの調査によれば、同誌の編集者であったポール・ケーラス (Paul Carus) は、ヘンケの論文を掲載するに際

し、その題名候補のひとつとして「カント以前のカント主義者」(A Kantian before Kant) を提案したという。⁽³⁸⁾ 「王陽明」と「カント」という、明治後期の日本思潮を象徴する東西の思想家の結合が、遠く離れたアメリカで生じていたことになる。イスラエルはこの要因を、ケーラス自身の「哲学的嗜好」(philosophical proclivities) に帰しているが、当時ケーラスの助手として活躍していた鈴木大拙の影響をいからか見て取るべきであろう。そしてその背後には、言うまでもなく、「カント」と「陽明学」(および武士道) をキーワードとして展開した、明治後期の日本における思潮が横たわっている。

また、イスラエルの指摘するように、フランス人オリエンタリストのルネ・グルーセ (René Grousset) は、一九二三年の著作の中で、上述のヘンケの著作などのほか、井上による先述のフランス語論文をも参照している。⁽⁴¹⁾ グルーセによれば「朱熹は博識な碩学と物質主義的な官吏を生み出した。王陽明は侍 (samurai) を作り出すのに役立った」というが、静的な朱子学と動的な陽明学という対比の表現は、先述の井上論文には直接登場しないものの、その後の「三部作」で強調される考え方である。

それではグルーセはどこからその極めて井上の陽明学観を摂取したのか。イスラエルはこの点については述

べていないが、おそらくグルーセは、同じく参考文献としてその名を挙げている、ロバート・アームストロング (Robert Cornell Armstrong) の著作を通じて「三部作」の影響を受けている。メソジスト派宣教師のアームストロングによって一九一四年に著された『東方からの光——日本儒学研究』 (*Light from the East: Studies in Japanese Confucianism*) は、同時期に西洋で発行された著作の中で、もっとも直接的に「三部作」の影響を受けて書かれたものであると言える。同書冒頭の参考文献一覧では、ジェームズ・レッジ (James Legge) に並んで井上の三部作が挙げられている上、その章構成は「朱子学派 (Shushi School)」 「陽明学派 (O-Yomei School)」 「古学派 (Classical School)」 「折衷学派 (Eclectic School)」 と、井上の学派分類を完全に踏襲している。

また、この点もイスラエルは指摘していないが、同書出版の翌年には、当時ハーバード大学滞在中の姉崎正治が、同書への書評を書いている。姉崎によれば、同書の中核部分は、ほぼ全て井上「三部作」の「簡訳版」 (a translation in abstract) に他ならない。⁴³ それゆえ同書は独創性に欠け、しかも「三部作」にあつた重要な要素をとどころぞ恣意的に欠落させてしまっている」と姉崎は批判しているのだが、それは反面、同書が井上「三部作」の影響を強く受け

て書かれていることの証明でもある。「三部作」の外国語訳は遂に出版されることがなかったが、アームストロングの著作などを通じて、「三部作」は実質的に西洋の陽明学理解に影響を与えていたことが分かる。これに加えて、イスラエルの指摘するように、ボヘミア生まれの著述家であるアーンスト・ゼンカー (Ernst Viktor Zenker) による一九二七年の著作『中国哲学史』 (*Geschichte der chinesischen Philosophie*) は、先に述べた『哲学の普遍史』に収められた井上哲次郎の「日本哲学」を、またデニングによる「三部作」の英文書評を参照している。⁴⁴

このように、井上の「三部作」そのもの、あるいは同書に端を発する「日本陽明学」は西洋にまで影響を及ぼしたが、一方で、井上が当初意図していた、海外 (西洋) に対して「日本哲学」の存在を証明しようとする試みは、その目的を達成したとは言い難い。ここまで紹介した様々な文献のいずれも、江戸時代に独創的な「日本哲学」が展開されたという、当初井上が展開したストーリーを認めているようにには思われないからである。「三部作」を模倣したアームストロングの著作でさえ、その章名を「三部作」に倣って例えば「陽明学派の哲学」とするのではなく、「陽明学派の研究」 (*Studies in the O-Yomei School*) などとして、「哲学」という言葉を用いることを意図的に避けているよ

うに思われる。

おわりに

西洋人が「日本に哲学は存在しない」「日本人に哲学は不可能である」と見ていた明治期の日本において、井上哲次郎は「日本哲学」の存在証明と世界発信を試み、国際東洋学者会議で発表を行った。それは『哲学の普遍史』への「日本哲学」の参画といった成果を挙げもしたが、しかし結果として世界が着目したのは、井上が発信しようとした「日本哲学」と言うよりも、あくまでも「支那哲学」の一派としての「陽明学」であった。

「日本哲学」の存在を証明しようとする井上の試みは成功しなかった。しかし同時に、井上を主要な震源地のひとつとする陽明学認識は、訪日留学生などを通じた清末民初の中国における受容と相まって、西洋のオリエンタリス・ト・シノロジストたちの関心呼び起こし、彼らに少なからぬ影響を与えた。「世界」を意識して模索された「日本哲学」の試みは、周知の通りやがて「武士道」論や「国民道徳」論といった「一国主義」的な思潮へシフトして行くことになるのだが、その変遷について、あるいはそれらの思潮が本当に「一国主義」的に形成されたものであったの

かについては、今後の課題としたい。

注

- (1) たとえば井ノ口哲也は、「三部作」執筆の内的動機を「徳教の淵源」の「闡明」に見出している（井ノ口哲也「井上哲次郎の江戸儒学三部作について」、『東京学芸大学紀要 人文社会科学系Ⅱ』第六〇号、二〇〇九年、二二九頁）。
- (2) 井上哲次郎『日本陽明学派之哲学』富山房、一九〇〇年。
- (3) 山村獎『近代日本と変容する陽明学』法政大学出版局、二〇一九年、二六四頁。
- (4) 森下直貴「井上哲次郎の〈同Ⅱ情〉の形而上学——近代「日本哲学」のパラダイム」、『浜松医科大学紀要 一般教育』第二九号、二〇一五年、三—四頁。
- (5) グラムツキーは後に来日し、山口高等学校、第七高等学校造士館、陸軍大学校、山口高等商業学校などでドイツ語を教えた（上村直己『九州の日独文化交流人物誌』熊本大学文学部地域科学科、二〇〇五年、六四—六八頁）。
- (6) 井上哲次郎「万国東洋学会の概況及び東洋学研究の方針」、『東洋哲学』第五編第三号、一八九八年、一一九頁。
- (7) なお「解説」は「そこで井上は、儒教と国学を軸と

して、近世日本思想の展開を紹介している」と述べているが、実際にはフランス語版でもドイツ語版でも「国学」については結論部分でなく簡単に言及されるのみであり、「軸」として取り上げてはいない（島蘭進・磯前順一『井上哲次郎集 第九巻 論文集・解説』クレス出版、二〇〇三年、一二二頁）。

(8) 同前、二四頁。

(9) Chamberlain, Basil Hall. *Things Japanese: Being Notes on Various Subjects Connected with Japan for the Use of Travellers and Others*. London: Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd., Tokyo: The Hakubunsha, 1890, pp. 269-270.

(10) Ibid., pp. 77-78.

(11) *The Japan Weekly Mail, Reprint Series I: 1870-1899, Part 4: 1885-1889, Vol. 43: July to December 1888*, Edition Synapse, 2006, pp. 541-542.

(12) デニング「日本ニ於テ哲学上ノ急務ナル問題」、『哲学会雑誌』第一冊第八号、一八八七年、四〇九—四一一頁。

(13) 福澤は『文明論之概略』第二章「西洋の文明を目的とする事」で、「文明」を「外に見わるる事物と内に存する精神」に区別し、「一見すると導入しやすい文明の「外形」よりも先に文明の「精神」を導入すべきことを説く（福澤諭吉『文明論之概略』慶應義塾大学出版会、二〇〇九

年、二六—二九頁）。

(14) 慶應義塾『慶應義塾百年史 中巻（前）』一九六〇年、四〇頁。

(15) Inoué, Tetsusirô. *Sur le Développement des Idées Philosophiques au Japon avant L'Introduction de la Civilisation européenne*. Paris: Imprimerie Orientale G. Maurin, 1897, pp. 5-6.

(16) Ibid., pp. 6-7.

(17) Ibid., pp. 23-24.

(18) 福井純子「井上哲次郎日記 一八八四—一九〇『懷中雜記』第一冊」、『東京大学史紀要』第一号、一九九三年、三九頁。大島晃は「三部作」のうち「陽明学」と「古学」が先行した理由を説明する文脈で「井上は総じて日本の哲学史を著すに当たって中国の儒教の受容にとどまらず日本人が自家の創見を唱え得たかどうかを評価の基準にしている」（傍点原文）と述べている（大島晃「井上哲次郎の『東洋哲学史』研究」、『ソフィア』第四五巻第三号、一九九六年、七六頁）。

(19) Inoué, op. cit., p. 18.

(20) 一八七四年には英国聖公会宣教師のトーマス・マクラッチー（Thomas McClatchie）によって『御纂朱子全書』巻四九「理氣一」の翻訳を中心に朱熹の鬼神論・理氣論を解説した書籍が出版されており、朱熹は“philosopher”

- と形容せられた (McClatchie, Thomas, *Confucian Cosmogony: A Translation of Section Forty-Nine of the "Complete Works" of the Philosopher Choo-Foo-Tze with Explanatory Notes*, Shanghai: American Presbyterian Mission Press, 1874)。またジョージ・イスラエルの整理によれば、一八七六年にはゲオルク・フォン・デア・ガブレンツ (Georg von der Gabelentz) による『太極図説』の翻訳、一八八〇年にはヴィルヘルム・グルーベ (Wilhelm Grube) による周敦頤『通書』の翻訳が登場している (Israel, George L. "Discovering Wang Yangming: Scholarship in Europe and North America ca. 1600-1950," *Monumenta Serica: Journal of Oriental Studies*, Vol. 66, No. 2, 2018, p. 361)。
- (21) Inouye, op. cit., pp. 26-27.
- (22) 「わたしたちは、東洋哲学について語るとき、哲学について語るべきではありませんが、この点に注意すべきは、わたしたちが東洋哲学と名づけるものは、哲学というより東洋一般の宗教的なものの考え方に近く、宗教的な世界観が哲学と見なされがちだということです。わたしたちは、真理が宗教の形式を取る場合と、哲学的な思想の形式を取る場合とを区別してきました。東洋の哲学は宗教的な哲学です」(G・W・F・ヘーゲル『哲学史講義I』長谷川宏訳、河出書房新社、二〇一六年、一六九頁)。
- (23) 福井純子「井上哲次郎日記 一八八四—一九〇『懷中雜記』第一冊」三八頁。
- (24) Wundt, Wilhelm, Oldenberg, Hermann, Goldziner, Ignaz, Grube, Wilhelm, Inouye, Tetsujiro, Hans von Arnim, Baumnker, Clemens, Windelband, Wilhelm, *Allgemeine Geschichte der Philosophie*, Berlin und Leipzig: Druck und Verlag von B.G. Teubner, 1909, p. 100.
- (25) Ibid., p. 105.
- (26) Ibid., p. 113.
- (27) 村上哲三・谷本宗生「井上哲次郎『巽軒日記——明治二六—二九、四〇、四一年』」『東京大学史紀要』第三十一号、二〇一三年、一一二頁。
- (28) Denig, Walter, "Confucian Philosophy: Reviews of Dr. Inoue Tetsujiro's Three Volumes on this Philosophy," *The Transactions of the Asiatic Society of Japan*, Vol. 36, 1908, pp. 108-109.
- (29) Ibid., p. 117.
- (30) 荻生茂博『近代・アジア・陽明学』ぺりかん社、二〇〇八年、三八四頁。
- (31) 同前、四〇〇頁。
- (32) Israel, op. cit.
- (33) Ibid., pp. 363-364.
- (34) Waters, Thomas, *A Guide to the Tablets in*

a Temple of Confucius, Shanghai: The American Presbyterian Mission Press, 1879, p. 216.

(35) Israel, op. cit., p. 367.

(36) Ibid., p. 372.

(37) Henke, Frederick G. "Wang Yang Ming: A Chinese Idealist," *The Monist*, Vol. 24, 1914, p. 30.

(38) Israel, op. cit., p. 375.

(39) 小島毅『近代日本の陽明学』講談社、二〇〇六年、九四—一二三頁。

(40) Israel, op. cit., p. 370.

(41) Grousset, René. *Histoire de la Philosophie Orientale: Inde - Chine - Japon*. Paris: Nouvelle Librairie Nationale, 1923, p. 358.

(42) Ibid., p. 358.

(43) M. Anesaki [Review of the book *Light from the East: Studies in Japanese Confucianism*, by Robert Cornell Armstrong]. *The Harvard Theological Review*, Vol. 8, No. 4, 1915, pp. 565-566.

(44) Israel, op. cit., p. 370. イスラエルはまた、'ユインの'ノロニストであるアルフレッド・フォルケ (Alfred Forke) が一九三四年の著作の中で王陽明を論じる際に高瀬武次郎を参照していると、高瀬の具体的な著作名を挙げずに述べているが、これはフォルケが別の箇所で述べている

ように、高瀬武次郎『支那哲学史』(一九一〇年)の中国語訳である『中国哲学史』(趙蘭坪訳、一九二五年)である。フォルケは王陽明に限らず、随所で高瀬の著作(の中国語訳)を参照している。またフォルケは他にも、謝无量『中国哲学史』(一九一七年)、鍾泰『中国哲学史』(一九二九年)、また渡辺秀方『支那哲学史概論』(一九二四年)の翻訳である『中国哲学史概論』(劉侃元訳、一九二六年)などを参照している (Forke, Alfred. *Geschichte der mittelalterlichen chinesischen Philosophie*, Hamburg: Cram, de Gruyter & Co., 1964, p. VII)。フォルケが中国哲学を論じた大部の著作は、このように高瀬の『支那哲学史』から(翻訳を通じて)直接、あるいは同書をかなりの程度参考を受けていることが分かる。高瀬の著作が謝无量を通じてフォルケに与えた影響について、そしてより広く、近代のドイツ・日本・中国を繋いで行われた、中国哲学をめぐる概念の循環については、次の文献を参照。Gentz, Joachim. "Es bleibt alles in der Familie: Eine Geschichte von Reisen in philosophischen Kreisen." Ehmecke, Franziska, Müller, Martin (Hrsg.). *Reisen im Zwischenraum - zur Interkulturalität von Kulturwissenschaft*. Würzburg: Ergon-Verlag, 2012.

(東京大学特任助教)